広報 伊達 147

発行日　令和６年３月10日
発行者　伊達地区小学校長会
　　会長　遠藤和宏
編　集　　同　　広報部

《巻頭言》

普通って素晴らしい

伊達地区小学校長会副会長
五十嵐　　修
（伊達市立堰本小学校長）

全員参加の修学旅行

今年度、修学旅行に「参加児童14名、欠席者なし」で行ってきました。当時感染症が流行し、直前に学級閉鎖などの対応を行った学年も複数ありました。出発間際まで毎日、「電話よ来ないでくれ･･･」と心配していたので、無事に全員で行くことができたのは何よりでした。子どもたちにも担任にも保護者にも、「全員で行けた！」を強調し、大成功と話しました。そして、昨年度も同じ心配をしていたことを思い出しました。昨年度もはらはらしながら、結局何とか全員で行くことができました。全員が学校行事に参加するという普通の出来事を、とてもうれしく感じた瞬間でした。

普通の学校生活とは？

感染症や不登校、家庭の事情など様々な理由により、全員出席という一見普通に思えることがなかなか達成されません。小規模校の本校ですら難しいのですから、人数の多い学校ではなおさらのことです。大規模校に勤務していたある年は、１年間で児童が全員出席した日はありませんでした。欠席者が最も少ない日で４名でした。それでも非常に稀な少なさで、当時の教頭先生と、「今日は４人しか休んでない！」と驚いたものです。

ところで、「普通」の意味を国語辞典で調べると、「ごくあたりまえなさま」とありました。では、学校生活において「普通＝ごくあたりまえなさま」とはどんなことでしょうか。一日の学校生活を追ってみました。毎日学校に来る、教室に担任の先生がいる、あいさつをする、授業を受ける、友達と仲良く元気に過ごす、給食を食べる、安全に学校から帰る。これらのことが、日々淡々と行われていくのが普通の学校生活でしょうか。「できて当たり前」というのが、普通の学校生活に対する評価かも知れません。しかし、現実の学校生活はどうでしょうか。学校に来ない子どもがいる、担任の先生が休んでいる、あいさつが返ってこない、授業に取り組まない子どもがいる、けんかやトラブルが多発する、食物アレルギーへの対応がある、下校途中にけがをする･･･。普通に毎日が過ぎていくことは、まずありません。

普通を価値づける

教育目標に向かって、学校づくりや子どもの育成を推進していくことは校長としての責務です。評価改善を行いながら、よりよい学校づくりを目指して取り組んでいかなくてはなりません。そのような中、学校における普通のことに対してもっと評価をしていきたいと考えています。「今日も全員元気に登校できて素晴らしい！」「全員出席で行事ができてうれしいね！」「みんな仲良く過ごすことができてえらいね！」など、「できて当たり前」から「当たり前にできること、普通にできることは、本当に素晴らしい」という視点を持ち続けていければと思います。

普通って素晴らしい

先日、ある先生が笑顔で「校長先生、今日は何もありませんでした。普通の日でした。何もないことが成長ですね。」と話してくれました。普通の毎日を送ることができる幸せを噛みしめていきたいですね。

《 研 究 部 よ り 》

研究を通した「伊達はひとつ」の証明

伊達地区小学校長会研究部長　鈴　木　茂
（伊達市立大田小学校長）

1　はじめに

今年度は、令和４・５年度第Ⅱ期研究の後半の年でした。８月の福島県小学校長会研究協議会会津大会では、第５分科会（環境教育）が成果を発表し、第９分科会（特別支援教育）が資料を提供しました。その際、伊達地区の研究が高く評価され、２年間の研究をよりよく締めくくることができました。これは、校長先生方の研究に対する理解と熱心な取組のおかげです。ありがとうございました。

2　令和６・７年度第Ⅲ期研究に向けて

次年度からの第Ⅲ期研究は、以下の２グループに分かれ、各分科会の課題に基づいて研究します。既に、０年次研究として進行しており、「アセスメントシート」を活用しながら、自校の実践を振り返り、再構築を図っていただいているところです。

＜発表分科会＞

【第９分科会「自立と社会性」】
視点２：基礎的・汎用的能力を育成するキャリア教育の推進
研究推進校：伊達東小　梁川小　大田小　柱沢小　掛田小　睦合小　半田醸芳小　伊達崎小

＜選択分科会＞

【第８分科会「危機対応」】
視点１：いじめ・不登校への適切な対応と体制づくり
研究推進校：伊達小　堰本小　粟野小　保原小　上保原小　小国小　醸芳小　国見小

２月には、県小学校長会より「令和６・７年度研究の手引き」が発行されました。この手引きを基に、伊達地区の実践研究を、益々充実させていきましょう。

3　令和９年度の全連小発表に向けて

令和９年度は、郡山市において全国連合小学校長会研究協議会を開催します。そして、伊達地区が 13 の分科会発表の内、第２分科会「組織・運営」を担当します。

全国各地の校長先生方から様々なご意見をいただくことは、校長個人としての力量を高めると共に、伊達地区の教育力の向上にも結び付く貴重な機会となります。もし、研究のための研究として実践に取り組むとすれば、後ろ向きの感情が湧くかもしれません。しかしながら私たちは、日頃から校長としての働きかけをどうすればよいか考えながら活力ある組織づくりと学校運営に取り組んでいます。そして、一人で悩むのではなく、校長同士が日常的に学び合い研鑽に励んでいます。日頃の取組が、既に実践研究に結び付いています。

校長である自分自身に、そして伊達地区の校長であることに自信と誇りをもち、日々の成果を堂々と発表し評価していただこうではありませんか。

4　おわりに

「伊達はまとまっていますね」と、お話しいただくことがあります。おそらく、研究発表、配付資料、刊行物などを通して、感じてくださっているのだと思います。「伊達はひとつ」を毎回口にしますが、外部の方からいただいた「まとまっていますね」の言葉は、それを証明しています。ですから、これからも私は、「伊達はひとつ」を口にしていきます。

《生徒指導部より》

生徒指導部調査から見える今後の方向性

伊達地区小学校長会生徒指導部長　齋　藤　貴　恵
（桑折町立睦合小学校）

はじめに

令和５年度、生徒指導部で行った「『東日本大震災・原子力災害』に係る生徒指導上の諸問題」に関する３つの調査の結果及び考察はすでに公開されているが、改めて考えてみたい。

１　〔調査Ａ〕子どもたちのこころのケアに向けた校長としての取組

震災発生から13年が経過するが、県内には、いまだ1926人の震災関連の区域外就学児童がおり、昨年よりも24人増えている。また、震災により心に何らかの傷を受けた事が要因と思われる反応を示した児童も多い。校長として、区域外就学児童へ配慮しつつも、すべての児童に対して、ＳＣやＳＳＷなどを活用しながら、全職員で児童理解と心のケアに努めることがより求められる。

また、ＳＣではいじめに関する相談の増加が、ＳＳＷでは、不登校及び発達障がいに関する相談の増加が見られた。相談件数は、調査開始以来増加し続けている。校長として、全教職員が共通理解のもと、組織的な取組を図り、中学校との連携も考慮しながら、ＳＣやＳＳＷをより有効に活用できるようにしていく必要がある。そのためにも、効果的な事例等について校長同士の意見交換を大切にしていきたい。

２　〔調査Ｂ〕「不登校」「いじめ」「虐待」「暴力行為」の未然防止と早期解消に向けた校長としての取組

不登校児童数は、県全体では、前年比1.4倍増であった。本地区でも、前年比22名の増であり、中学１年生での増加が顕著である。いじめの認知件数は、本地区においては74件と大幅増となったが、重大事態は、４件減となり、いじめの積極的認知が進み、重大事態に発展する前に対策が講じられてきているといえる。

校長として、多様化する要因を探りながらチームとして適切な対応をとれる体制強化が求められる。さらに、最も重要なことは、「楽しい学校づくり」や「分かる・できるを実感させるための授業の質的改善」「自己肯定感・有用感を感じることができる親和的な集団作り」等、日常的な指導の積み重ねが、未然防止・早期発見に効果的であることは、変わらず大切な視点であると考える。

３　〔調査Ｃ〕ネット・ＳＮＳ利用の実態と校長としての取組

児童のネット・ＳＮＳの利用状況は、ここ数年の調査から、約７～８割の児童が、自分専用の機器を持ち、保護者の目の届かないことが可能な状況の中、長時間利用していることが明らかになった。その利用内容は、８割が「動画サイトを見る」次いで、「分からないことを調べる」「通信ゲームをする」であった。生活リズムや脳への悪影響が懸念される。写真や動画等の個人情報を扱う機会が増えていることも推測され、児童に正しい利用の仕方を継続して指導する必要がある。また、使用機器へのフィルタリング機能の設定についても43.7％が「分からない」と回答しており、ネット利用に潜む様々な危険から身を守る手立てを、保護者、児童共に学ぶ機会を設定し、よりよいメディアの利活用と望ましい生活習慣の確立に力を尽くす必要がある。

おわりに

県校長会では、改訂生徒指導提要の活用による発達支援的生徒指導での具体的な対応策や教職員のリーガルマネジメント研修の必要性も話題になった。今後、さらなる研修や意見交換等をもとに、各校および各児童の状況や課題に応じて策を講じ課題解決が図られることを望む。

お忙しい中、各調査にご協力いただきましたことに心より感謝申し上げます。

《特色ある教育活動》

学校も地域も花いっぱいに

桑折町立醸芳小学校長　遠 藤 和 宏

本校の「花いっぱい運動」の取組は５年目となる。当時、震災の影響を受け整備されていなかった花壇の状況から、「よい環境の中で子どもは育つ」という学校経営理念を掲げ、花いっぱいの環境づくりを始めた。今年度は、花いっぱいコンクールで「福島県教育長賞」を受賞した。

１　苗は種から

地域ボランティアの方の「費用をかけずに」という助言から、苗は全て種から育てている。４月にはマリーゴールドやサルビアなど、９月にはパンジーやビオラなどの種まきをした。今年は校長も自宅で種まきをし、害虫に苦労しながらも、大量の苗を提供することができた。

２　苗植えや水やりは子どもの手で

花壇やプランターへの苗植えは、用務員のほか、飼育栽培委員が担当した。その後の水やりも、飼育栽培委員が交代で行ったり、月ごとに学年割当を決めて行ったりした。今年の夏は酷暑のため、花の世話は大変だったが、自主的に水やりをする子どもたちの姿が見られ、嬉しい限りであった。

３　地域へ花のおすそわけ

今年は、苗を植えたプランターを近所の施設に贈呈しようと、人権擁護委員からいただいた花の苗をもとに、郵便局、介護施設など３箇所に贈呈し、大変喜ばれた。春には再度贈呈する予定である。

児童が創る教育活動を目指して

伊達市立梁川小学校長　渡 邉 か お り

本校では、自分の学校は自分たちの手で創ることを意識付けたいと、様々な教育活動において児童を主体的に関わらせる取組を行ってきた。

○　運動会そして学習発表会

児童が考案したスローガン「仲間とつなぐ150年目の絆」。一年間アリーナに掲示し、様々な場で活用した。運動会では、応援をはじめ、団体競技の戦い方を話し合わせ、集団の一員であることに気付かせた。学習発表会では、児童自身が観客に伝えたいことを決め、準備、練習を行った。児童は試行錯誤することで、友だちと相談、協力する必要性を知り、発表できた達成感を感じた。

○　児童会活動

６月の全校集会。縦割り班活動をとおして、全校生の親睦を図るとともに学校をもっと知る機会にしたいと企画運営委員が何度も話し合い、チェックポイントやヒント、カードを工夫した校内オリエンテーリングを行った。異学年で助け合う姿が多く見られ、児童も大満足の２時間となった。

４月のあいさつ運動に続き、12月にありがとう運動を実施。昇降口にありがとうカードとポストを設置。投函されたカードは放送で紹介後、校内掲示された。うれしい温かい気持ちが全校生に広がった。現在は、毎朝各教室をまわり、温かい言葉を広げる運動を児童が展開している。

豊かな歴史や自然に包まれ、梁川スクールコミュニティとの連携により、豊かな体験活動を展開する本校。学んだふるさと体験を、今度は発信し行動につないでいく児童を目指し、今後も児童が創る学校を、頼れる教職員とともに築いていきたい。

編集後記

例年になく暖かく、雪が少ない冬がもうすぐ終わろうとしています。今年度も計３回の「広報伊達」を発行することができました。お忙しい中、玉稿をお寄せくださった皆様に心より感謝申し上げます。今年度はコロナの規制が緩和され、「コロナ前」の教育活動を取り戻しつつある一年間だったと推察いたします。しかし、その中で「働き方改革のさらなる推進」「地域・学校の実態に応じた最適な学び」等、新たな課題も見えてきた一年間でした。今後も、「伊達はひとつ」の思いを体現し、様々な課題に対応できる校長会として連携を深めていきたいと思います。